

# 水稲作況指数速報 「102」

～ 9月15日速報値と変わらず

農林水産省は10月15日現在の水稲作況指数を10月30日に公表した。9月15日速報値と変わらない。全もみ数が総じてやや多いないし平年並みとなり、登熟はウンカ等の病害虫の影響があった中国・四国・九州を除いて全国10a当たり予想収量は539kg(作況指数102)と算定。予想収穫量は860.4万トンで主食用は818.3万トンと見込まれた。晩生を除いてほぼ出揃った感がある。前年比では北海道・中国地方が下回る結果となったがその他の地域では前年を上回る収穫高予想値となっている。また、水稲作付面積は159.7万haと前年に

比べて1万8,000ha増加したが、主食用作付見込面積は152.2万haで前年と比較して2,000haの減少となっている。前号でもお伝えしたが、思ったほど獲れていないとの声があったため、選別ふるい目幅別収穫量(子実用)を確認すると、一般的に市場流通している1.85mm以上パス規格では昨年度が96.9%に対して僅差ではあるが96%と0.9%減少、1.8mmパス以下は昨年度に対して0.9%増加、ふるい目幅重量で差が大きかったのは2.0mm以上の規格が前年比2.9%減少している事が分かる。出穂以降の高温障害や台風被害による登熟不良も否めないのではないだろうか。全国ベースでは昨年度のコメもまだ余剰感があり価格が低下している中で本年度のコメ消費動向が気になりだ。



ふるい目幅別重量分布状況

年産	計	ふるい目幅別重量 (%)					
		1.70mm	1.75mm	1.80mm	1.85mm	1.90mm	2.00mm以上
平成24	100	0.6	1	1.5	2.2	13	81.7
25 (概数値)	100	0.8	1.3	1.9	2.7	14.5	78.8

索引：農水省平成25年産水稲の作付面積及び予想収穫量より(10/15現在)

## 農政の大転換 減反政策見直しへ

農水省は農業施策・補助金の見直し作業に入っているが、その中間取りまとめ案は11月6日の自民党農水関係部会で了承された。大きなポイントは米政策で、農水省は減反について、5年後を目処に行政による生産調整に頼らずとも生産者等を中心に需要に応じた米生産ができる状況となるよう取り組むとし、5年後の減反廃止を視野に入れて補助金制度の見直し等が打ち出された。明らかになった具体案は、現行の定額部分である直接支払交付金(減反に協力した場合10a当たり主食用で定額1万5千円)は30年産での廃止を前提に26年産から削減すること、変動部分である米価変動補填交付金は26年産から廃止し、激変緩和措置として水田・畑作経営所得安定対策の収入減少影響緩和対策(通称ナラシ)と一本化することとしている。また水田有効活用の観点から飼料用米等への支援充実をは

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

かり、飼料用米補助金への数量払い導入(現行8万円/10a)、飼料用米等への多収性品種導入なども打ち出された。

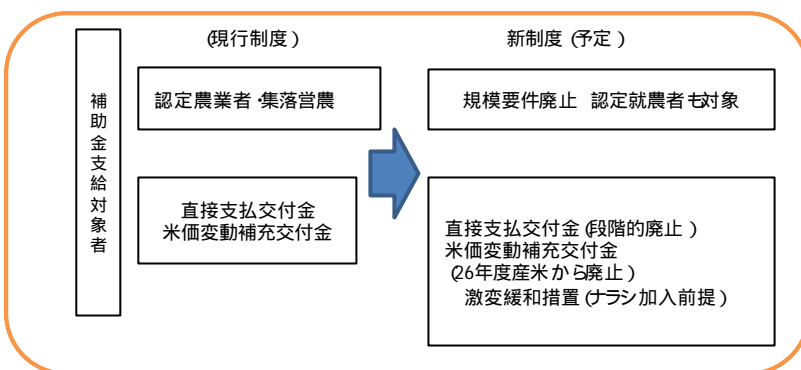
一方、中山間地域、環境保全、農地・水保全等、農業の多面的機能に着目し、従来の制度を組み替え新たな直接支払い制度の創設も打ち出された。更に、麦・大豆等に対する畑作物直接支払については、単価を見直す一方、生産拡大のイン

センティブが働くよう、26年産から数量払いを基本とする形に組み替え、規模要件は課さず対象は認定農業者、集落営農だけでなく、27年産からは認定就農者も新たに加えるものとした。

これらにより「米余り」で40年以上続いた減反政策は急転直下で大きな転換期を迎えることとなった。主食であるコメの価格維持を目的に、税金も投入され減反は長年継続されてきたが、少子化・食生活の変化等により消費減少はとまらず、一方需要も多様化する流れの中で全国一律の減反制度が機能しなくなってしまったと言わざるをえない。ただこれからは、見方によっては農家の責任と判断によって自立して自由に生産出来る時代の幕開けと捉える事もできる。TPP発動を睨んだ動きでは段階的に海外から来るコメの関税を引き下げる案も政府は検討されているようで、生産者はより一層の経営努力をしないとイケない局面を迎えた。今後の農政にますます目が離せない状況だ。

減反とは コメの生産を抑制し米価の下落を防ぐ農業政策のこと。1970年代より農林水産省が需要を予測した上で生産数量目標を決定、都道府県に割り当てる施策を実施。

## 現在論議されている減反廃止施策について



## 「今日もニコニコ無事カエル！」農作業事故防止の合言葉 2011年農作業事故の死者400人を下回る

2011年度の農作業の死亡事故が90年以降最少の366人となった。それでも1日に1名の割合で命を落としている計算となる。農林水産省は農作業安全確認運動が全国的に展開、2011年度から3年間で農作業における死亡事故を1割以上削減する政策目標を掲げている。運動の成果か前年比32名減となり一定の成果と言えるが高齢化の進行と共に事故のリスクが高まる傾向は依然高いままだ。農作業中に発生した死亡者の年齢別比較では高齢者に集中しており80歳以上では33%、65歳以上では77%を占めている。今後ますます高齢者に対してのケアが鍵となってくるのではないだろうか。農作業は気象環境の悪い中での作業や足場が安定していない作業を行う点、機械類・刃物を使用するケースが多く事故を起こし易い環境下にある。また、他産業に比べて農業労災の対策も立ち遅れているようである。当たり前のことだが「今日もニコニコ無事カエル！」。農作業を行なう前にひとこと発して家を出てみるのはどうだろうか？



急激に寒くなってきましたね。今年は残暑も厳しく暑い日が続いていたので一気に寒くなった感じがします。近頃では「秋バテ」なる症状を訴える人が増えているそうです。夏場の疲れが秋口に出てくる事を言うそうですが、そんな時は身体を温める食事と美味しい新米で、栄養をつけたいですね。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>